

トマトかいよう病は予防と発病株の早期発見が重要です！

近年、トマト栽培において、かいよう病の発生が目立っています。平成25年産の冬春トマトでは、県内全域で発生が確認され、壊滅的な被害を受けたほ場も見られました。

本病は細菌（*Clavibacter michiganensis* subsp. *michiganensis*）による病害で、種子伝染及び土壌伝染のほかに、芽（葉）かきや誘引などの管理作業によってできた傷口から侵入します。前年に本病の発生が見られたほ場では、トマトの生育初期から注意が必要です。また、本病は効果的な防除対策が限られるため、**予防と発病株の早期発見が重要です。**本病の特徴をよく知るとともに、ほ場内をよく観察し、本病の発生を防ぎましょう。

【発生のしくみと特徴】第一次伝染は種子伝染と土壌伝染（植物残渣）であり、第二次伝染は芽（葉）かきや誘引などの管理作業によってできた傷口からの侵入である。また、発病適温は25～28℃で、多湿条件下で発生しやすく、感染から発病するまで時間がかかる。

〈初期症状〉



写真1 下葉の萎凋と枯れ上がりの症状。小葉の一部が萎凋して全体に広がる。



写真2 葉の周縁がしおれ、後に乾燥して上方に巻き上がり、葉脈の間が黄化し小葉全体が褐変枯死する。

〈株全体の萎凋症状〉



写真3 萎凋枯死株

株全体の萎凋症状は、主に①生育初期に感染した場合、②管理作業で直接維管束に病原細菌が感染した場合が考えられる。



写真4 連続的（畝伝い）に発生したほ場の様子。管理作業で病気が広がる。

〈部位別の症状〉



写真5 病徴が進むと髓部も褐変して粉状となり空洞となる。



写真6 茎や葉柄の維管束が褐変する。



写真7 発病株の根部



写真8 果実に発生した鳥目状病斑
幼果期に降雨が多くて湿度が高く、ほ場内の病原菌密度が高い時に発生する。
※激発したほ場や露地栽培では見られることがある。

【防除対策】

- (1) 循環扇や暖房機利用による通風を行い、植物体への結露を防止し、施設内の湿度低下に努める。
- (2) カスミンボルドーや銅シン水剤を散布し、予防に努める。
- (3) 発病が疑われる場合には、簡易診断キット (Agdia 社製 ImmunoStrip 等) を活用し、早期発見に努める。
- (4) 発病株は速やかに抜き取り処分する。発病が疑われる株の管理作業は、他の株と別にするか最後に行う。
- (5) 曇雨天時や早朝等、茎葉が濡れている時間に摘芽や摘葉等の管理作業は行わない。
- (6) 摘葉、摘果にハサミを使用する場合には、ハサミの刃をこまめに消毒する。
- (7) 発生ほ場では栽培終了後に土壌消毒を実施する。

詳しくは、農業環境指導センター (<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>) までお問合せ下さい。
(Tel 028-626-3086)